



華・絵・器

華林の華の会

かりん はな 会

金沢 / 東京

「華絵器：華林の華の会」は旧暦上巳、端午の節句（彩流華35号で紹介）にひき続き、金沢と東京で以下のように開催されました。この頁と次頁は東京展のもようです。

彩流華・風の華 椿一色 / 華林

絵(軸)：鯛図 / 華林 軸装 / 永嶋明

器：陶舟形花器と方、円形花台(厚板)

意匠 / 華林 制作 / 前田弥富(陶器)、但田一彦(花台)

東京 駒込 古流会館

11月23日

古流生け花展とともに(2ページに続く)

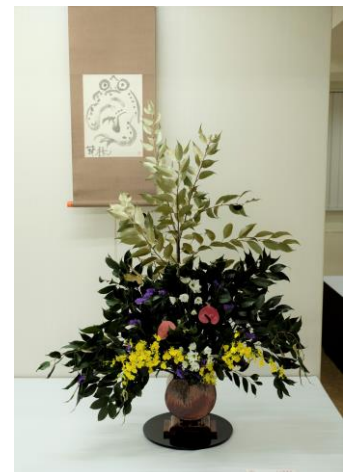


なげ入れ調(自由花) / 森川理青  
松、椿、ユーカリ、百合、カスミソウ、  
行李ヤナギ、他

器：陶箱形花器 意匠 / 華林

制作 / 前田弥富

会場入り口にて



禮華 しいのき、ほか  
/ 坂本豊静

絵(軸)：蛙図 / 華林

軸装 / 永嶋明

器：陶鏡形花器

意匠 / 華林

制作 / 前田弥富



彩流華・五華 椿一色（左より、風の華・水の華・劔の華・土の華・火の華）

／華林、八巻九華、東森久華

絵(軸)：左より、円相-風 円相-水 円相-劔 円相-土 円相-火／華林 軸装／永嶋明

器：方-円形陶花器 意匠／華林 制作／前田弥富

東京での『華林の華の会』は十月二三日に東京・駒込の古流会館で恒例の「古流松盛会花展」と同時に開催されました。

華林の彩流華を中心に禮華や古流生花などが華林の絵、書の軸にあわせて生けられました。

【右】

禮華 きやら(いちい)、ほか

／岡本理敏

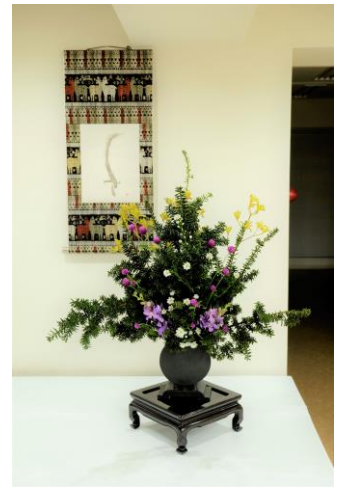
絵(軸)：劔図／華林

軸装／永嶋明

器：陶鏡形花器 意匠／華林

制作／前田弥富

四足花台



【下】

生花 右：『老松』(赤松)／牧野理正

左：五葉松 / 松井理富美

書(軸)：『ひめ松』／華林

軸装／永嶋明

器 右：四足陶花器 意匠／華林

制作／前田弥富

左：銅薄端 塗花台





金沢 深谷 本蓮寺

8月27-28日

陰暦 七夕の節句

“三面大黒天神の<sup>しょうごん</sup>荘厳”

三面大黒天の荘厳 左：彩流華・火の華／荒清照華  
 （華は椿一色） 右：彩流華・水の華／東森久華  
 三面大黒天の前に対瓶(ついへい)に生けました。



禮華・椿一色／荒清照華  
 器：飾り四柱、足付方形陶花器



古流応用花  
 左：マルバノキ、トルコ桔梗ほか / 小泉青香  
 右：ソケイ、百合ほか / 越山風佳  
 器：四足陶花器（左右とも） 意匠／華林  
 三面大黒天の尊像を模写した軸の前に左右対瓶に。

梶の葉ならぬ桑  
 の葉のうらに、  
 故事にならって  
 来場者の願いご  
 とが筆で書かれ  
 ました。

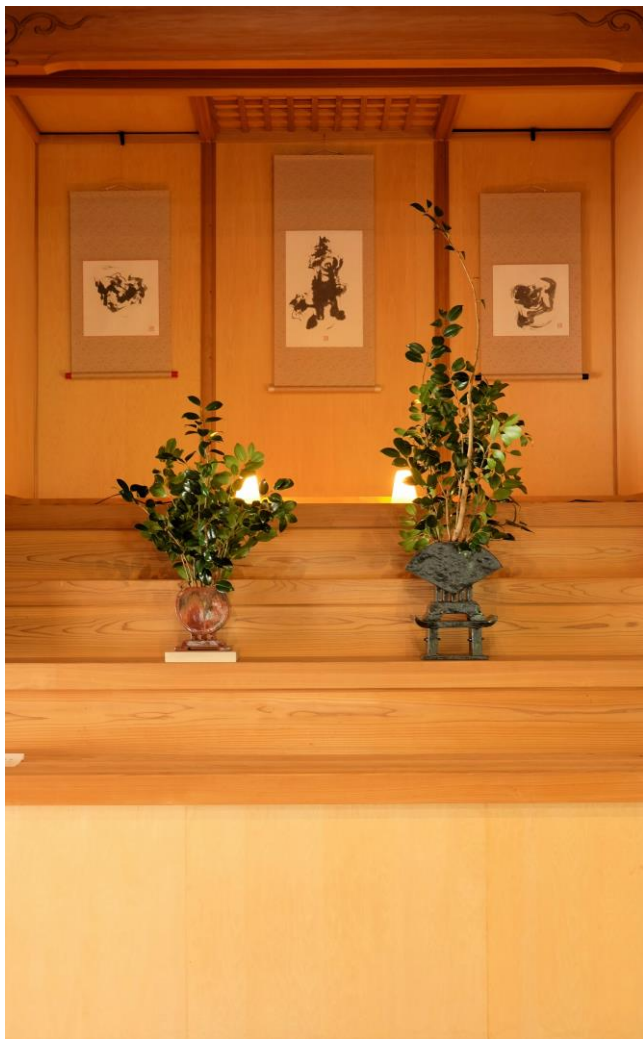


竹とペーパーによるインスタレーション『天の川』  
 ／中村勝美 三面大黒天の向い側に。



旧暦の七夕にあわせての華の会は金沢市の本蓮寺のよく知られる三面大黒天の荘厳がテーマとなりました。おおきく趣がことなる新旧の本堂に、彩流華や禮華などが美しく映えました。(前頁が旧本堂、この頁が新本堂の写真)

茶話会や作品解説もおこなわれ華林のほか荒木智啓住職による説明、荒木明日子寺庭婦人による語り「七夕」、そして香司友代香「薫物と織姫のお話し」などもありました。



彩流華・椿一色 右・劔の華 左・土の華 / 華林  
 絵(軸)：左より、円相-火 円相-劔 円相-水 / 華林  
 器：鏡形陶花器 扇形陶花器 意匠 / 華林  
 新本堂の祭壇に。



茶話会での華林



彩流華・水の華・椿一色 / 山崎理恵  
 書(軸)：『はごろも』 / 華林



新本堂、金屏風の前の禮華(両端)と古流応用花。華林の絵に。右は籠目編のカゴの秋海棠。

## “数”の話

数字(数)はアジア古来の哲学では重い意味を持っています。次項の中秋の名月では満月よりも十五日という数を問題としていることを説明しており、また偶数と奇数についてもふれています。偶数は「陰数字」とよばれ、奇数は「陽数字」です。何かにつけ、日本では奇数⇨陽数字を貴ぶ風習があります。上巳の節句(ひな祭り)、端午の節句、七夕、重陽の節句は三月三日、五月五日、七月七日、九月九日と陽数字が重なる日です。一月一日のお正月もそうです。またお月見は十五夜、十三夜と奇数の夜です。あるいは、ご祝儀に包む金額も奇数がいいと考える人は少なくありません。

おもしろいことに、偶数のなかでも“2”という数だけは奇数の扱いをする場合があります。江戸以来の生け花「生花(せいか)」では生ける枝数は奇数とするのが規則ですが、例外的に2だけは大丈夫なのです。ご祝儀の金額も、奇数以外に2は大丈夫とする地域も少なくないでしょう。

“2”という数の捉え方については、じつは『2には“0”が隠れている』という、なんとも示唆ぶかい伝承があるのです。ここでは、五行では陽を意味する“火”が、その数では“2”があらはめられ、また古来“火”は形では三角形で表現されることとかかわりがあるようです。

伝統文化では数(数字)にまつわる決まりごとやエピソードは数限りなくあります。たとえば『天の数、地の数』にもいくつもの考え方があられるようですし、8と9の重視、3・5・7の組み合わせや33という数へのこだわりなど、ちよつと思ひ浮かべるだけでもつらつらと出てきます。

さて、まったく方向を変えて科学の見解をみましょう。ニュートンに代表されるかつての物理学、科学が人間スケールだとすれば、アインシュタインで思い浮かべるような近現代の科学は人間の感覚を離れたミクロ・マクロのスケールです。とくにミクロのスケールの科学では、かつては迷信とされたアジア古来の哲学と一致する場面が不気味なほどに増えています。

ミクロの科学では“数”の存在感はとても強いのです。たとえば『原子』の違いは電子と陽子・中性子の数の違いです。電子や陽子が何個組み合わせられているかで、水素原子、酸素原子などといった違いが生じます。水素原子、酸素原子を構成している電子や陽子に違いはなく、組み合わせられている“数”の違いによってさまざまな原子が生まれるのです。そしてそれら原子の組み合わせで分子ができます。水素原子2個と酸素原子1個が結合したとき“水”(H<sub>2</sub>O)ができるのがその例です。物質の違いを追求めれば同じ陽子と電子、中性子の数の違いにたどり着くのは、まさに『色即是空・空即是色』の世界ですね。陽子・中性子・電子の数の違いによって喜怒哀楽の舞台である地球やさまざまな物質、人間の肉体も生じているのです、なんとも素敵な話です。

“光”でも、紫や緑、赤といった色の違いはその光の周波数⇨波長の違いによって生じます。周波数が大きいものは紫色、小さいものは赤、さらに大きくなれば目に見えない紫外線やX線に、小さくなれば赤外線や電波になるといった具合です。逆にいえば周波数を“色”と感じるように人体は造られているのです。数の話はそれこそ数限りありません。私もつと勉強したいと思っています……。

# 八月十五夜 と 九月十三夜



日本のお月見は八月十五夜と九月十三夜です。十五夜の方はひろくアジアの各国でおこなわれていますが、十三夜のお月見は日本だけの風習です。

十五夜は陰暦十五日の夜のこと、十三夜は十三日の夜のことです。新月の日から数えてそれぞれ十五番目の夜、十三番目の夜です。八月十五夜は満月と思われがちですが必ずしも満月とは限らず、満月は十六日の夜にずれ込むことも少なくありません。にもかかわらず、十五夜を愛でることになっています。アジア古来の天文学は正確で満月を読み違えることはありません。ここに、アジア古来の哲学が数字(数)を何よりも重視していることがい知ることができます。

さて、日本にしかない九月十三夜のお月見は、平安時代、宇多天皇(法皇)が延喜十九年(919)に始めたときから続きます。これは八月十五夜のお月見の風習が中国から入ってきて半世紀くらい経ったころで、八月十五夜のお月見が日本の貴族社会でどれほど決定的な行事となっていたか、微妙な時期でしょう。遣唐使が廃止されて二十余年、いわゆる国風文化が醸成され始める時期でもあり、日本独自の九月十三夜の風習が生まれた背景には興味深いものがあります。

宇多天皇は菅原道真などの有能で良心的な人材を重用するなど、当時権勢をふるった藤原北家とのバランスをとろうとしたことで知られます。その治世のもとで数々のすぐれた文化が生まれ、国風文化が醸成されました。譲位してのちには熊野に参籠し、また京都の東寺では空海が残した真言密教に深く帰依したようです。空海が金剛峯寺を建立した高野山の地は紀伊半島の高い山岳地帯の南端部分で、『熊野の奥の院』とされる玉置山につらなる場所です。つまり、空海が行場としていたのは熊野の奥地の一面と考えることができ、このことから

宇多法皇が空海に傾倒した背景に古来の熊野信仰、山岳修験にかかわる文化・哲学があると考えることは十分に可能です。

その一世紀ほど前、平安京Ⅱ京都のまちがつけられてゆく時期に位にあったのが嵯峨天皇です。嵯峨天皇もまた、こちらは同時代を生きた空海にふかく帰依しています。手紙とのやり取りをみると初期には空海がへりくだった言葉づかいをしていたものが、のちには逆転して嵯峨天皇の空海に対する言葉づかいは完全に師に対するものとなっているそうです。東寺の建立など、空海の考え方が嵯峨天皇を通して平安京の都市と文化の骨格をつくるのに大きな影響をあたえたと考えることができます。

それからほぼ一世紀のちに宇多天皇は即位、しかし十年後に譲位して都を離れたため信任の篤かった菅原道真は藤原一族の奸計にあい左遷、慌てた宇多法皇はその後も一度朝廷への影響力をとり戻しています。九月十三夜のお月見をはじめ開いたのはこのころなのです。こうしてみると、空海思想が平安時代の数々の節目に大きな影響を与えたと考えることができます。とくに和風の文化が定着した根底には、生前死後を問わず空海が存在が無視できないのです。

京都のまちは奈良と比較されます。仁王像や狛犬の「阿吽」の左右の配置は平安以降に日本で一般的になったであろう配置と奈良時代の配置は逆であることが知られます。阿吽の配置は陰陽の配置と同義で、若狭（福井県）などの奈良の文化の色濃いところではやはり陰陽の配置は平安以来一般的になった形とは逆である例が見られます。<sup>註①</sup>

偶数と奇数の重視も奈良、平安の違いの一つです。奈良の修二会は「二月の重視」とも考えられ、インドの文化にならったものと説明されたりしますが、実際に初期の東大寺ではインド僧のかかわりが見ら

れ、若狭にも別の東大寺のインド僧とされる人物の足跡がみられます。

<sup>註②</sup> そして奈良の文化には、仏教を通して古代インドの文化の影響が感じられるのです。古代ヒンドゥー教の「陰陽の配置」は奈良のそれと一致しており、古代中国の万古伝説やそれと同じ系譜のうえにある日本神話の陰陽の配置は平安以降の日本のそれと一致しています。

空海はこのことを強く意識していたのでしよう。それは、胎蔵・金剛界の二つの曼荼羅を持ち帰ったこととも深くかかわりあっているように思われます。<sup>註③</sup> そして奈良にはなかった奇数を重視する文化、陰陽の配置の転換などが平安時代に次々と生まれていったのは特筆すべきことです。

東寺や熊野で空海の哲学をふかく理解した宇多法皇は、あるいはまるで空海が乗り移ったかのように、八月十五夜にくわえて九月十三夜のお月見を催したのです。そしてそれが日本の社会に定着していったのは、日本という国の不思議さを物語っています。

ではなぜ九月は十三夜なのか、八月は満月ではなく十五夜なのか、いくつかの要因があるように感じます。陰暦各月への五行の配当、数霊（かずたま）とも呼ぶべき数字の重視、時節による月の南中高度の違い（冬に近づくほど南中高度が高くなる）などさまざまな要因があるのでしようが、それら複数の要因も、究極ではひとつのことに帰結する、そんな複雑怪奇とも単純明快とも受け取れる考え方がアジア古来の哲学にはみられるのです。（写真は今年の九月十三夜／華林）

<sup>註①</sup> 左右の配置は（阿・陽）が向かって左、（吽・陰）が右、が奈良では多い。平安以降日本で定着したのはこの逆。江戸時代の床飾りの書には一の間を後者、二の間を前者とするものもみられる。<sup>註②</sup> 東大寺・修二会を創始した実忠は若狭（福井県）の伝承ではインド僧、その師の東大寺開山・良弁は若狭出身とされる。修二会と若狭の

深い関りがあると思われ、胎蔵に説く説では済まされないう。胎蔵に説く説では済まされないう。胎蔵に説く説では済まされないう。<sup>註③</sup> 金剛界に対応するのが奈良型の文化、胎蔵に対応するのが平安型の文化と考えられる。

# ハンノキ

ハンノキはやせ地に生え、いわばパイオニア的な性格をもちます。近年は二十年ほどの周期で噴火する三宅島では、火山灰のやせ地に多数生えているのを目にしたことがあります。白山でも、山道で突如ハンノキの列を目にし、山が部分的に崩壊してやせた地層が現れた場所なのかと推測しました。根に『窒素固定細菌』が共生していて、空中の窒素から養分を作り出すことができるそうです。そして土地が肥沃になるに従い、他の植物にとって代わられるのです。

マンサクを少し大ぶりにしたような枝ぶりと葉ですが、切り花として生けると葉は早めに垂れてきます。そのため生け花の花材にはなりにくいのですが、芽だしのころには流通に回ることもあるようです。

地域によってはハンノキではなく「コバンヤナギ(小判柳)」などの名前で出回ります。松かさ状の去年の実などがエキゾチックな表情をみせますが、温かい場所に長く生けておくと花芽が伸びて垂れ、しまいに開花して大量の花粉を発生します。近年ではこれがかかりのアレルギーの原因となることが判明しました。花芽が伸び始めたら要注意です。

大きな木では松のような木肌となり、ちよつとした風格を感じさせます。荒地地で他の木が入り込みにくいいためか、林(純林)を形成するのを目にするのも多いようです。とくに磯浜の海岸近くが多いでしょうか。

榛の木。カバノキ科、ハンノキ属。ヤシヤブシなどが近い仲間。写真は石川県の南端、加佐岬にて。四月十六日。同時にアオキや丁子桜、キイチゴなどが咲いていました。

